

<論文>

「コミュニケーションと看護—— 過重労働を防ぐありかたとしての『間合い』」

佐藤典子

要約

超高齢社会の日本においてケアを行う看護師と患者の関係を研究してきたが、看護師が毎年、一割以上、離職する理由は何か。その離職の理由として、近年の研究において、看護師の過重労働が挙げられているが、その主な先行研究は、経営学、とりわけ、組織論からの研究が多く、組織全体の改善を求めるような問題提起が多い。もちろん、こうしたマクロな問題提起には病院全体のいわゆるパフォーマンスを上げるという意義がある。一方で、看護師に限って言えば、これまでの筆者の研究では、看護師の特徴であるジェンダー化——担い手の9割が女性である——が看護師のあり方に影響があるのではないかと仮説を立て、過労の原因を探ってきた。その結果、ジェンダー役割として、過度に利他的な役割を要求されることに原因の一つがあると明らかになってきた。本稿では、ジェンダー役割とは異なる視点——実際の看護そのものはどのように行われているか——を考えながら、「間合い」をキーワードに看護師の過労について考えてみたい。

キーワード

「看護師—患者関係」「コミュニケーション」「社会的相互行為」「間合い」「ハビトゥス」「グラウンディング」「相互予期」

はじめに

これまで、日本の超高齢社会においてケアを行う看護師と患者の関係を研究してきた¹。その中で、看護師が毎年、一割以上、離職する事実を前に、その理由を探ることが、看護師と患者の関係には不可欠と考えていた。近年の研究

において、その離職の理由として、看護師の過重労働が挙げられていて、主な先行研究には、経営学、とりわけ、組織論からの研究が多く、組織全体の改善を求めるような問題提起が多い。たとえば、看護師や看護管理者のコンピテンシーを論じる研究などである。もちろん、こうしたマクロな問題提起には病院全体のいわゆるパフォーマンスを上げるという意義がある。とはいえ、病院職員の役割は、医師をはじめ、役割が厳密に異なっており、職員全員が同じ動きをしているわけではない。そこで、これまでの研究では、看護師の特徴であるジェンダー化——担い手の9割が女性である——されていることと、看護師のあり方に影響があるのではないかと仮説を立て、過労の原因を探ってきた。その結果、ジェンダー役割として、時には、母性的とも言える過度に利他的な役割を要求されることが職業として求められる関係性に原因があるとインタビューなどから明らかになってきたⁱⁱ。

一方で、上記のように、看護職誕生の歴史的分析——修道女に由来する伝統的価値観を受け継いだ看護婦のあり方——から、そのイデオロギーが看護師らの行動を制御もしくは後押しするような仕組みの考察をしてきたのであるが、個々の看護行為、すなわちパーソナルな対人関係は、そもそもいかにして成立していたのかという視点も看護の実践においては考えていくべきではなかったか、そのような反省も筆者にはある。つまり、看護師の過労は、これまでの看護労働研究の文脈では、病院組織のあり方（報酬も含め）や病院内の人間関係、医療制度上の不備、保育などの制度的不備、社会的評価の適正さなどから来るものと考えられてきたのがあるが、こと、看護行為そのものにおける社会的相互作用——看護師と患者のコミュニケーション——の不全における過労という視点で考えれば、看護師と患者のコミュニケーションが成立していなかったゆえのものというよりは、看護行為としてのコミュニケーションが成立させるための過剰適応としても考えることができるのではないか。看護師の属性がジェンダー化されているがゆえのジェンダー役割の過剰適応と分析していただければ、看護師の過労の原因——看護行為そのものに内在するコミュニケーション

システムにあると仮定される——を説明しきれていないのではないかと、と言えるであろう。看護師にとって過労のない、スムーズな患者との関係性はどこから生じ得るのか、看護師と患者の相互行為を成立させるキーワードとして考えられる「間合い」の概念とそれを支えるいくつかのキーワードから考えてみたいと思う。

1. 相互関係を支える「間合い」とは何か。

看護行為そのものをいかにして過重労働せず行うことができるかと考えた際、過重労働を防止する方策として、今般のさまざまなものの機械化が挙げられるかもしれない。しかし、およそ、医療や福祉の現場の、とりわけ、看護師と患者のケアの関係などは、今般、隆盛を極める人工知能などの「人工」という語とこれほど折り合いの悪そうな組み合わせもないであろう。とはいえ、一方で、後期高齢者が一挙に増加する2025年を目前に、ケアの人出不足が言われて久しい今日、人工知能やロボット技術が医療や福祉の現場にいかにして出現させることができるかは、およそ3人に1人が65歳という超高齢化社会を目前に控え、現在すでに世界一の高齢化となった技術大国日本が世界に見せることができる近未来の姿ではないか。もちろん、ケアを機械技術が代行する（もちろん、それはケアの内容によるのだが）ことに心理的抵抗があるとしても、そもそも、技術的にできることをどう人間の振る舞いに載せていくことが可能なのか、という議論は別に存在するはずである。

そこで、考えられるキーワードが「間合い」である。言葉では説明しきれない、コミュニケーションの要諦として考えられる動きを「間合い」という語で表現できるのではないかと。容易に伝えることは難しいながらも、確実に人間の「知性」によって、他者に、次世代に伝えられるべきものと仮説を立てたい。まず、第一次集団である親密な親子関係、家族関係はもとより、教育現場での教師と子どもとの関係、会社組織における社員同士の関係など、様々な関係があるが、日々、同一の人間関係のなかでコミュニケーションを繰り返している家族が、良好な関係が築けているとすれば、それは、「間合い」がはかれていると言えるので

はないか。スポーツは、技術的なことを習得すると同時に、どう「間合い」をとるか、もしくは外すかが究極的に勝負の決め手となる。たとえば、医療や福祉の現場においては、ケアギバーとケアテイカーの間だけではなく、さまざまな医療者との間にさまざまな医療実践が組み込まれている。それは、言語によるものだけでなく、目に見える行為を含めれば、それを支える見えない諸実践があってこそその関係構築と言えるであろう。その見えない諸実践の中には、沈黙や何もしていないように見えることもあるかもしれない。あるいは、相手と何かをおこなうタイミングなど口頭で説明しないもの・こと、あるいは説明しきれないもの・ことがあるのではないだろうか。こうしたことが、ある種の意味・意義を持って立ち上がってくることもあろう。身体と行為の関係を分析した社会学者のピエール・ブルデューならこれをハビトゥスによるプラティックというであろう。ブルデューいわく、ハビトゥスは、人々の行為のあり方の方向性を決める原理と定義されていて、それは、人が所属する「場」に規定されている。そのハビトゥスによって、人々の行為（プラティック）がなされると考えるのだⁱⁱⁱ。そのプラティック自体がうまくいく技術、スムーズにいくことをいかにして表現するかといえば、それこそが日本語で言う「間合い」という言葉なのではないだろうか。ハビトゥスは、その行為の必然性やそれがうまくプラティックできることを表す、方向性を示すが、それだけでは、実際の行為が完遂できることを表現することは難しい。ましてや、コミュニケーションなどの相互行為は複数の人間によって行われることであるから、実体としてのやり取りをいかにするのか、外から見える部分と見えない部分を含めて、いかにして行われているのかは、また別のスキームによる説明が必要である。そして、ケアにおいては、それは、再現性のある行為となり得なければ、スムーズなケアは提供できない。そこで、「間合いをはかる」という語をヒントに、看護師の働き方を考えることができるのではないかと考えた。実際に高齢者の患者などをケアする様子、たとえば、患者を支える腕の力の入れ具合、身体の引き寄せ方や間合いなどは、機械的に決定されるものではなく、実際に患者に対面し

て行わるべきものである。

さて、絶妙に人々との「間合い」をはかるといった実践として、前述のブルデューの挙げている例が、パリの凱旋門広場での車の往来である。それこそ立錐の余地もないほどに種々の車などで埋め尽くされた広場は、四六時中、多くの車が行き合っていて、左から来た車が右に行き、その逆もあり、絶妙なタイミングで速度を変え、事故を起こさず、行きたい方向に行っている。その理由は、運転者である人々が運転技術だけでなく、独特のハビトゥスを持っているからだと述べているのだ^{iv}。それは、誰もが、進む速度や方向などを意識せずとも予測して自身の車のスピードや方向を調整しているからである。では、なぜ、そのようなことが可能であるのか。それを説明するにあたって、人類学者の木村大治が提唱する「相互予期」^vという概念から考えてみたい。それは、「自身は、こうしたい、そして、相手が次にこうするだろう、では、自身はこうしよう」といったように、である。集合密度の高い空間において、誰もが、同じように、その「間」を感じているのではなく、ましてや、客観的に数値化できるものでもない。一台の車に焦点を当てたととしても、それは、一台の車の現象に過ぎず、それを再現性の高いものとして把握することは不可能である。こうした一種のエネルギーの集まる空間においてそれは、確かに存在しても、他者に伝えることは——言葉であっても数値であっても——困難である。その主観的な経験は、科学が発展し、人間行動が法則の網の目に捉えられるとの認識が高まれば、その一方で、その主体性が必然的に消えてしまう、パラドクスに陥る。個々の人間の主体性とは、法則通りに行動しないという意味に等しいからである。その臨機応変さこそが、人間の人間たるゆえんであり、それが適応をさらには過剰適応を引き起こすのではないだろうか。

2. コミュニケーションの観察・分析の困難—個々の物語と科学的分析の折り合い

その人間の「私」を観察しようとして考えられる、心理学者G.H.ミードが

提唱する主観的契機“*I*”はそれ自体を分離して取り出せる実体としては存在しえない。社会の影響を自己から排除することができるのであれば、それは、ただ名付けられない何かでしかない。そして人間の心の中の様子を心理学がつぶさに捉えていると仮定すれば、そのように、何らかの法則の網の目に捉えられていると人々が思うことによって、それは、主観性が人間の世界から失われてしまうことになる。さらに、そう思い込むことによって、主観性はすでに失われていってしまう。

一方で、ケアのやり取りといった相互作用は、ある専門技術によって裏打ちされたものであり、それが継承されてきたことも事実である。上記のバリのロータリーでの車のスムーズな行き合いに例を取らずとも、だれもが何らかの形で経験している「間合い」——しかし、主観的经验である——をいかにして考察の俎上に上げることができるのであろうか。主観的な経験をいかにして取り出すことが可能なのか。この問いには、以下のように考えることはできないだろうか。たとえば、人々が自身の何らかの経験に思い入れがあるとして、それについて話す。その様子は熱意として「熱量」といった表現で表されるかもしれない（昨今では、その熱意をカロリーという語で表現することもあるが）。看護の仕事で熱心に行う。看護の経験を、熱意をもって話す。それが、見る側、聞く側に伝わる（いわば第三者的に観察しうるように見える）。記号としての言葉にはその経験をしたことがあるもしくは想像できることにより、その理解を支える総体が存在すると言える。このように、「看護」という語をめぐって人々は、さまざまなことを想起させることができる。これを人工知能の用語で言うならば、「グラウンディング^{vi}」であり、その言葉の意味が過去の体験に根差しているからそれが可能となると考えられる。では、このように、相手にその思いが伝わることは、どのように考えることができるのか。たとえば、科学的な実験結果はいわば三人称であり、それが当事者もしくは当事者に近い関係（二人称）になることで、匿名性が捨象されなくなる。ホロコーストの死者数は、数字で表され、第三者の死でしかなく、代替可能な記録としての死と言え

る。一方、例えば、それが肉親、知人などかかわりのある二人称で語られうる死である場合、それは記録ではなく、記憶であり、物語となる。つまり、表面的なことがらの理解ではなく、メタレベルの認知を考えれば、そこに主観的な意味が抽出される。しかし、その個別具体的な経験に置いたままでは、それを考察することや操作することは困難である。

このように、科学的な手法の中では、個々の物語を語る難しさがあり、一方で、それを外部に抽出して観察可能にすることは非常に困難なことであろう。このような事態を説明する一つの方法として考えられるのは、前述の木村の「相互予期」概念による説明ではないだろうか。相手の意図することを予想し、かつ、こちら側からもかかわりを持つとすることは、コミュニケーションとして常に実践されてきたことであった。こうした二人称としての「相互予期」の関係は、木村の参与観察した社会だけでなく、私たちの住む社会においても同じように見られることである。これを説明する際に、考えうる概念としてこの「間合い」という言葉こそ、その両者のエネルギーを存分に交わらせることに役立っていて、状況を説明していると言えるのではないか。相手の意図する中心つまり、エネルギーの芯をとらえ、自身の持つ、なにがしかをそこにもたらすことができる、いわばハビトゥスを持った行為こそが「間合い」が取れていると言えるのであろう。

また、当事者研究を行っている医師の熊谷晋一郎は、人であれ、モノであれ、非接触で相手の行為に影響を及ぼすアフォードンスの概念を用いて行為を分析する。アフォードンスとは、行為を「アフォード（与える・提供する）」しているという意味である。たとえば、酒が入ったコップが目の前に置かれているとして、その存在は、人に「コップを持たせる」「口の中に入れて酒を飲ませる」ことを促しているとも言える。では、なぜ、このように人はアフォードされるのか。アフォードンスの条件である。すなわち、人が何によってアフォードされるのかは、その文化のあり方によって決まると言えるのであり、そのアフォードンスは、ハビトゥスによってその行為を方向づけられている。そして、それ

「コミュニケーションと看護—過重労働を防ぐありかたとしての『間合い』」 佐藤

は、文化によって決定されているがゆえに、規範によって正当化される。酒を飲むことが禁止されている文化では、その酒の入ったコップは人にアフォードしないであろうし、病気で飲むことを禁じられている場合も、未成年者である場合もそうであろう。しかし、酒が好きな成人している禁酒文化（もしくは宗教）のない人間にとっては、工作中などではない限りそれは、口元に持っていきようアフォードされている存在であろう。「間合い」は、絶妙に「アフォード」されている状況だ、と捉えれば、アフォード概念を用いることによって、その行為がまさに、絶妙になされることの説明が可能になるのではないだろうか。

3. コミュニケーションの多様性と「かかわらないことの工夫」

看護行為に限らず、おそらく、人々の社会的相互行為のあり方としてコミュニケーションは、いかに目の前のヒトやモノに「アフォード」され、いかに「間合い」を取るかによってなされてきたと言えるであろう。それでは、いかにして、絶妙な「間合い」を取ることが可能であるのか。前述の木村の研究から考えてみたい。木村は、「バカ・ピグミーの発話重複と長い沈黙」(1995)^{vi}において、バカ族の集まりの場での発話を参与観察した際、彼らのターン・テイキングの構造が欧米あるいは日本でのそれと異なっていることを指摘した。これは、狩猟採集民の社会的相互行為の性格に通底している可能性があるかと仮定し、1996年には、「ボンガンドにおける共在感覚」を発表^{vii}した。ボンガンド族は常に大声でほぼ常に誰かが発話しているのだが、その理由として「遠くにいても一緒にいる」という感覚を作り出しているのではないかと考察している。一連の研究について、私たちは、単なる文化の違いとして考えるのではなく、なぜ、このようなコミュニケーションを彼らが行っているのか考えることで、私たち自身のコミュニケーションのあり方も見えてくるのではないだろうか。というのも、一見、バカ族もボンガンド族も正反対のコミュニケーションを取っているように見え、私たちのコミュニケーションのいわゆる常識——ターン・テイキングなど——から考えて、「発話の重複」も壁の向こうの人にも話しかけて

いる「大声での会話」も「長い沈黙」もおよそ形式としてコミュニケーションが成立しているようには思えないからである。しかし、日本のようなハイコンテキストな文化において、察することや同調圧力が自明視される文化もまた、彼らから見て異質なものと言えるかもしれない。察することや同調圧力は、一見、相手のことを慮ってコミュニケーションを成立させようという意図を感じるものであるし、実際その効果があることも否定できない。しかし、「間合い」という考え方からすれば、それが、相手にとっても自身にとっても「絶妙な」ものであるかという疑問が残るであろう。それでは、いかにして、「間合い」を取ることがベストな行動であるのか。さまざまな文化圏を参与観察してきた木村は、社会的相互行為においては、「かかわること」よりも、「かかわらないこと」に関する工夫のほうが重要なのではないか^{ix}、と述べている。治療やケアの実践における隠れた「間合い」があると仮説を立てられる一方で、これを医療者やケアギバーが一方向的に構築できると考えることがそもそもコミュニケーションの相互性、もしくは相補性を棄損してしまうとも言えよう。ゆえに、相互にとって良好といえる「間合い」を取ることの極意は、おそらく、「間合い」を外した時に表れるのではないか。人間関係は、相手と対峙しているその瞬間にのみ形成されるのではなく、四六時中、あるいは、相手によっては一生かけて紡がれるものである。であるとすれば、直接、相手と向き合っているのではない瞬間をどう過ごしているか、それによって、「相手とところを重ね合わせて何かをおこなう瞬間の『間合い』」を絶妙に取ることができるのではないか。この仮説のヒントとなったのは、前述の木村による「共在感覚」という考えである。木村によれば、『『共存』『共生』という理想化された言葉』による「美しいコミュニケーション」ばかりではなく「人と人が一緒にいる限り、いがみ合いもすれば、無視しあうこともある。そういう関係も含んだうえでの『一緒にいる』という感覚」を表した。すなわち、「それぞれの人たちの、それぞれのコミュニケーションの形があるはずで、それを共存、共生とは別に『共在』と呼んだ」。すなわち、「間合い」を取るためには、「間合い」を取って

「コミュニケーションと看護—過重労働を防ぐありかたとしての『間合い』」 佐藤
ない時の行動がキーになるのではないか。逆説的ではあるが、「間合い」を取っ
ていない（もしくは一見、そう見える）状況（第三者的に観察可能となる）か
ら「間合い」の取り方を考えることが、過重労働にいたらない看護による相互
行為を構築できるのではないかと考えた次第である。なぜなら、「間合い」は、
さまざまな関係性を包含するアンブレラとしての言葉と考えられるからであ
る。よって、人間の「知性・知能」は、他者との人間関係のなかで思いもかけ
ないひらめきにより開花し、簡単には、観察できないながらも生活の中の実感
として社会関係を結んでいく中で着実に存在するものとなり、他者や次の世代
に伝えるべきものとしてつないでいくことができると考える。

謝辞

本研究は、科学研究費「起高齢社会における看護師の過労と患者らの社会的
包摂の日仏研究」（研究代表者：佐藤典子）により行いました。

-
- ⁱ 佐藤典子『看護職の社会学』2007 専修大学出版局
- ⁱⁱ 佐藤典子『看護職の働き方から考えるジェンダーと医療の社会学—感情資本・ジェン
ダー資本』2022 専修大学出版局
- ⁱⁱⁱ ピエール・ブルデュー 『実践感覚』2001 藤原書店
- ^{iv} 同 『男性支配』2017 藤原書店
- ^v 木村大治 2000 「拡散的会話場と相互返照的予期」『bit別冊身体性とコンピュータ』
pp.233-245 共立出版 インタラクティブであることの条件をお互いがお互いの行為
を予期している状態に求めた。
- ^{vi} グラウンディングとは、AIが言葉や概念を具体的なモノや現実の世界と結びつけて理
解する能力を指す。シンボルグラウンディング問題とは、記号接地問題とも言い、ス
ティーブン・ハルナッドによって命名された。記号システム内のシンボルがいかに実
世界の意味と結びつけられるかという問題。土屋俊他編『AI事典 第2版』共立出版
- ^{vii} 『アフリカ研究』46 pp.1-19
- ^{viii} 『叢書・身体と文化(2) コミュニケーションとしての身体』（菅原和孝，野村雅一編）
pp.316-344 大修館書店
- ^{ix} 木村大治「相互行為における『打ち切りの戦略』」『コミュニケーションの自然誌』（谷泰編）pp.414-444 新曜社。